

# 大官大寺第5次発掘調査現地説明会資料

## 1. 調査の経過

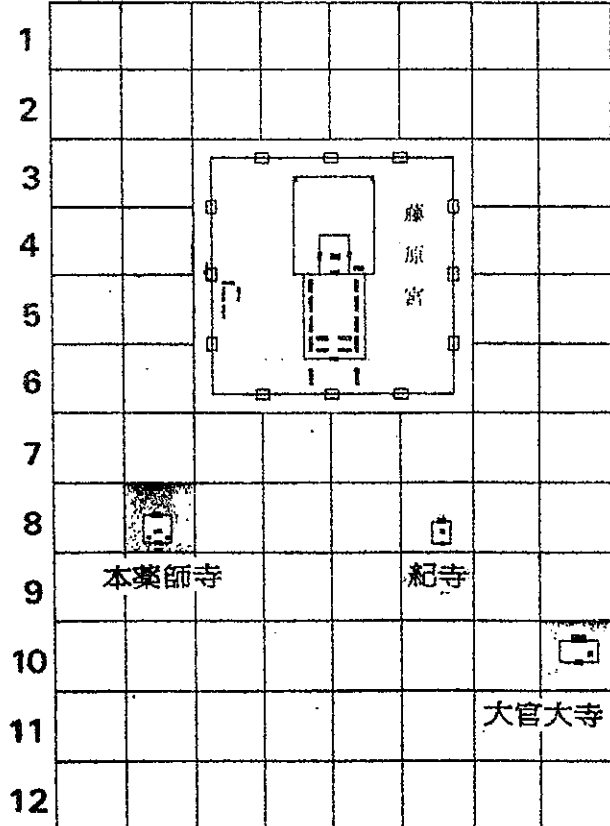
1978年10月28日 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

当研究所は昭和49年以来、大官大寺の伽藍配置やその規模を明らかにすべく、発掘調査を続けてきた。第4次までの調査で、9間×4間(153尺×70尺)に復原される講堂、5間×3間(79尺×42尺)の中門、南面東回廊15間(総長200尺)などが検出され、伽藍の中心部が判明している。昭和53年7月3日から開始された今回の第5次調査は、小字「塔ノ井」に残る土壇を中心に、東面回廊部分を含む1900mを対象として行い九重塔が建てられていたといわれる塔跡の規模の究明に主眼をおいた。調査の結果、塔の基壇規模が明らかになり、平面もほぼ復元することができた。また、東面回廊とその東に南北に走る造営時の溝などを検出した。

## 2. 検出遺構

**塔** 発掘前の塔の土壇は、南西部に突出部をもつ南北27m×東西24mの不整形なプランを呈しており、明治22年の橿原神宮の造営に際して礎石が運びさらされて以降、畑となって現在に至っている。調査の結果、中世以前に基壇上面が大きく削平されている

4 3 2 1 1 2 3 4



藤原宮の条坊

ことが明らかになった。基壇端には基壇化粧がなく、約25度の角度で立上がる傾斜面を形成しこの傾斜面に沿って多量の焼瓦が焼土と共に堆積している。現時点では基壇規模は確定していないが、100~110尺を越えるものと思われる。また基壇縁の斜面には中世の石組井戸などが作られている。

基壇上には礎石は全く遺存しないが、南側柱の礎石抜取穴3個と礎石据付け掘形1個、北側柱の礎石抜取穴1個、心礎の抜取穴を検出した。心礎の抜取穴は南北5.2m、東西5.3m、現存深1mあり、根石が一部遺存する。基壇上には柱筋の通る掘立柱穴があり足場穴の可能性もある。なお階段は認められな

かった。基壇周辺はバラスが敷かれ、回廊と近接する東裾には幅0.8mの南北溝が走り、回廊西側雨落溝をかねている。

**東面回廊** 発掘区の中央東側に7間分の回廊礎石を検出した。礎石は16個すべて原位置を保っており、桁行13尺、梁行14尺を測る。花崗岩で柱座などの造り出しは認められない。回廊基壇の上面は後世の擾乱が著しいが、火災をうけ赤変した基壇上には回廊の瓦や塔の建築材が落下している。回廊西側雨落溝までの軒の出は7~8尺である。

**SD260** 回廊心の東10mに南北にのびる発掘りの溝で、幅1.3~1.9m、深さ約0.6mを測る。溝内に多量の手斧の削り屑を含み、白土・雙斗瓦などが投棄されている。

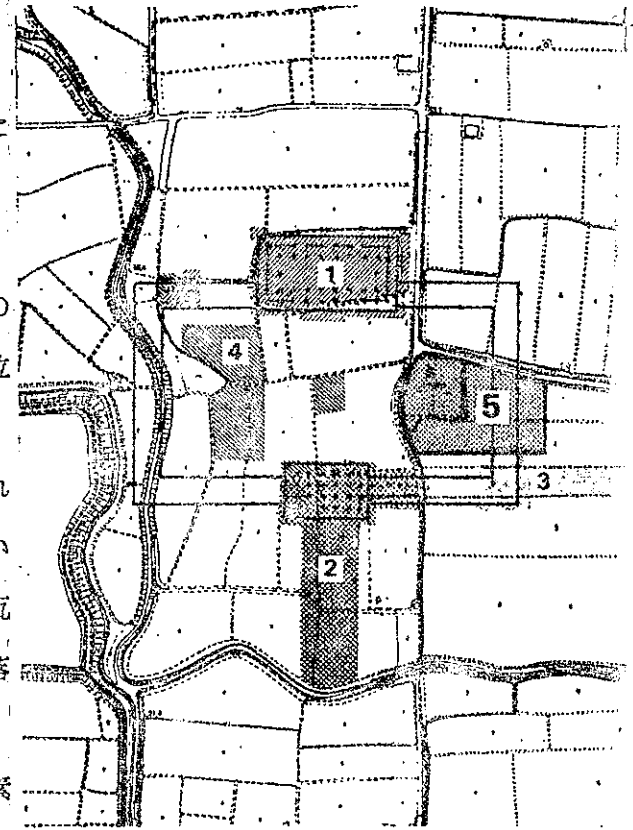
**その他** 発掘区東端の南側には焼失前に掘られた3個の不整形な土壇がある。また回廊を横断し、西側雨落溝からSD260まで延びる東西方向の掘立柱竊列を7間分検出した。掘方埋土には焼瓦を含み、回廊焼失以降の竊列である。

## 3. 出土遺物

**瓦類** 瓦は塔基壇周囲に焼け落ちた状態で厚く堆積しており、中にはコークス状になった瓦もみられる。軒瓦はいわゆる「大官大寺式」のもので、約1200点ある。軒丸瓦は6231-C型式、軒平瓦は6661-B型式が多数を占める。

**金属製品** 瓦層から金銅製風鐸・風鐸つり金具・銅製飾り金具・小銅鏡・鉄釘・銅釘などが出土した。透し彫りの唐草文様をもつ銅製飾り金具は隅木もしくは尾垂木木口面の飾り金具で、講堂出土形式に近似し、表面に鍍金が施されている。小銅鏡は完形品で、径4.5の無文鏡である。

**その他** 土器の出土は少ない。木簡の削り屑が2点、SD260から出土している。なお、瓦層からは壁土がかなり出土しており、表面に白土が塗られている。



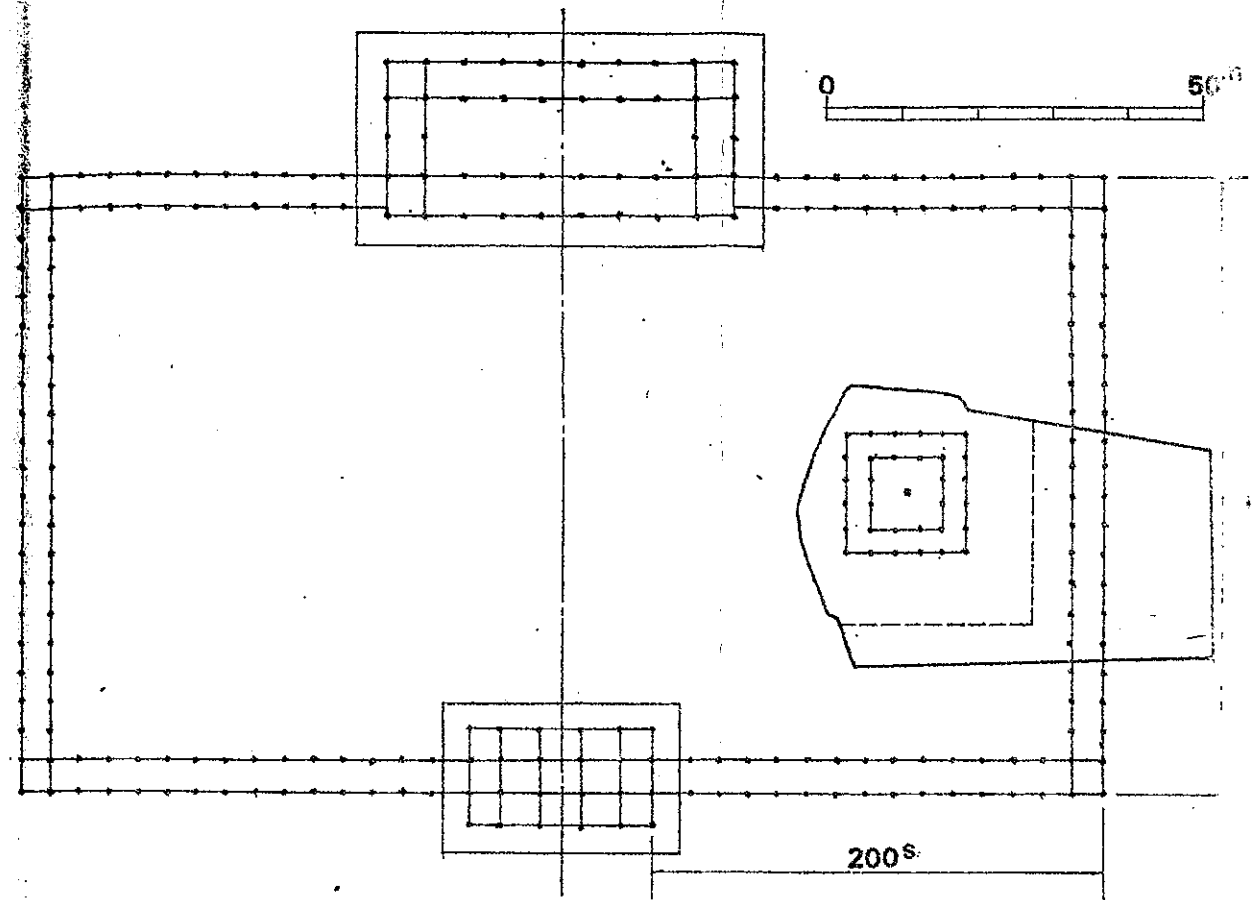
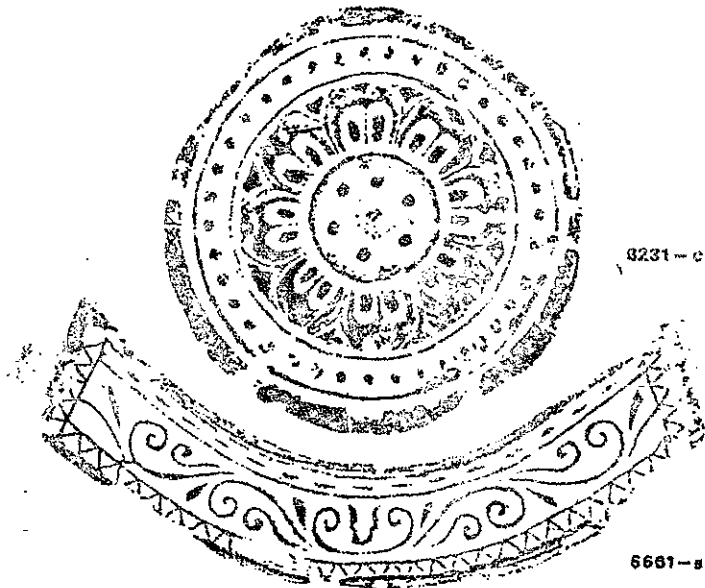
調査区位置図(1/3000) ※数字は調査次数

4. まとめ

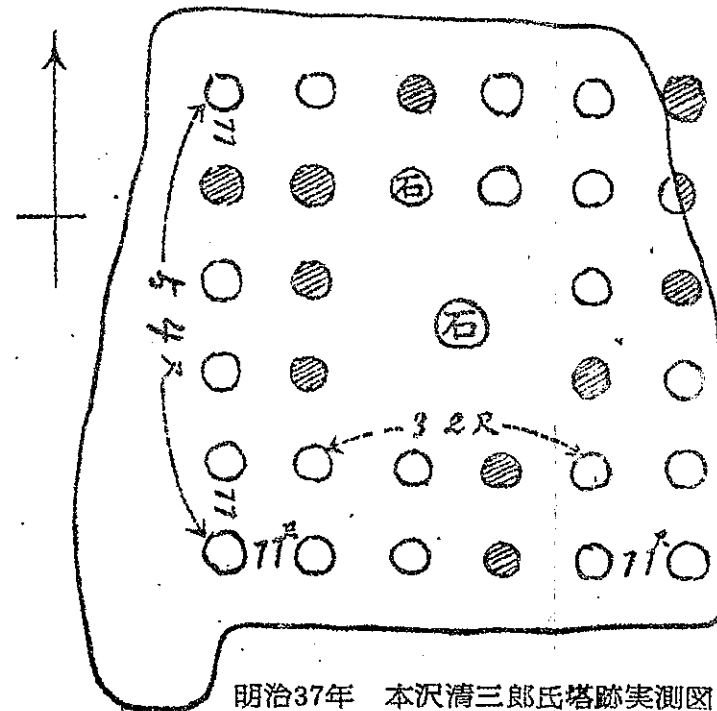
今回の発掘調査の結果、以下のような諸点が明らかになった。塔基壇は一辺100～110尺を超える規模をもつが、基壇化粧が未完のうちに火災にあっている。塔の平面は、明治年間に踏査した岡本桃里・本沢清三郎氏らの記録の通り5間四方で、各柱間は11尺等間の可能性が高い。なお瓦層出土の白土や飾り金具から、塔本体は完成していたものと推測される。東面回廊は従来検出のものと同規模であるが、西側で雨落溝を新たに検出した。

大官大寺略年表

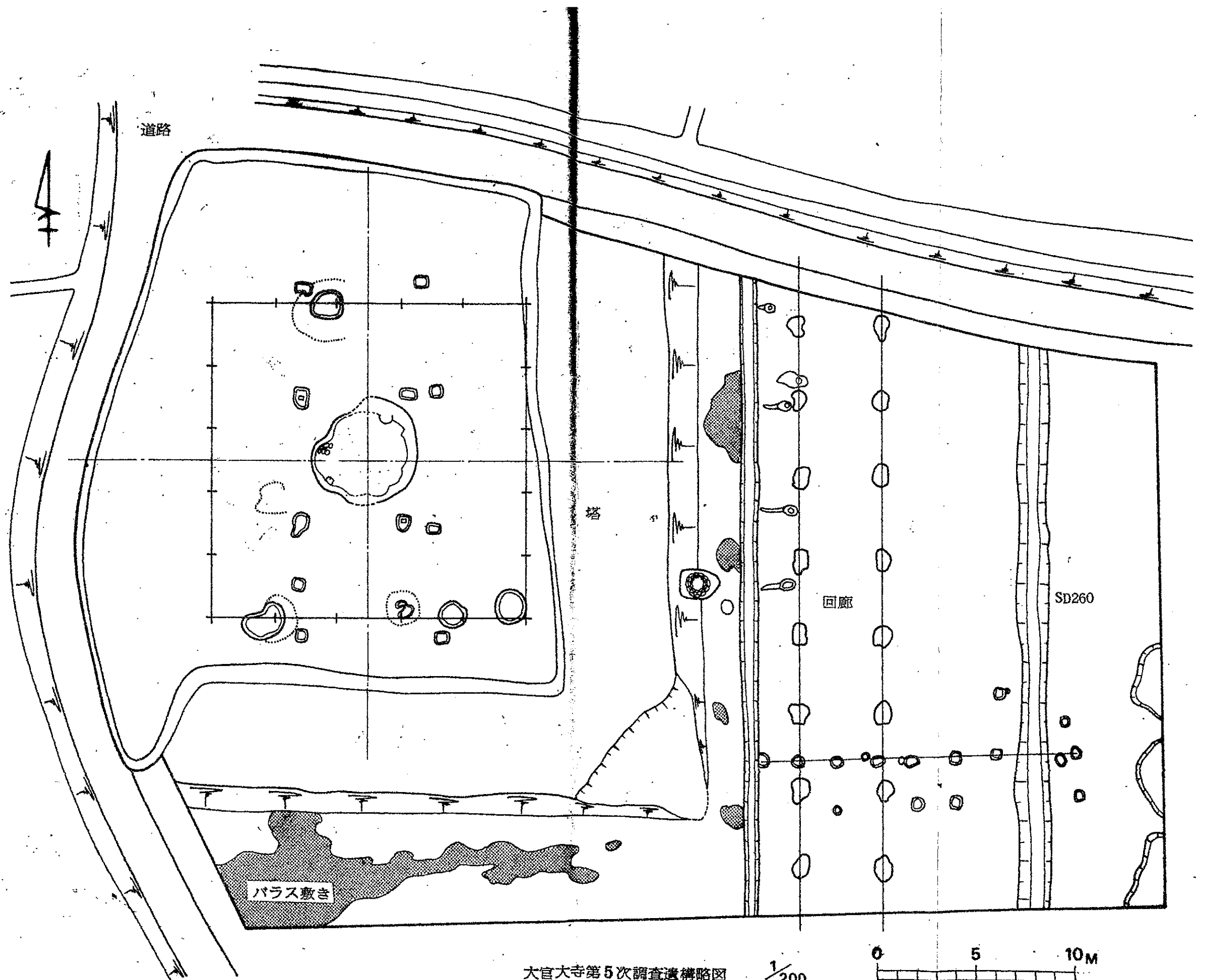
- 舒明11年 (639) 百濟大寺を造り、九重塔を建てる (書紀)
- 皇極元年 (642) 百濟大寺を造る (書紀)
- 天武2年 (673) 百濟の地より高市の地に大寺を移す (資財帳)
- 天武6年 (677) 高市大寺を改め、大官大寺とする (資財帳)
- 大宝元年 (701) 造大安寺司を職に準じ、造塔丈六二官を司に準ずる (統紀)
- 大宝2年 (702) 高橋朝臣笠間を造大安寺司となす (統紀)
- 文武天皇 九重塔・金堂を建て、丈六仏を造る (資財帳)
- 和銅4年 (711) 大官大寺・藤原宮焼亡する (統紀)



大官大寺伽藍復原図



明治37年 本沢清三郎氏塔跡実測図



大官大寺第5次調査遺構略図

1/200

